

I. 導入

メリークリスマス！2000年前、エルサレムから数時間の場所にあるベツレヘムでイエスがお生まれになりました。ヨセフとマリアは、ローマ帝国の人口調査のため、ベツレヘムにやってきました。しかし、宿屋に空室がなかったので、家畜小屋で一晩過ごすことになりました。そういうわけで、生まれたばかりのイエスは飼い葉桶に寝かせられたのです。そして、天使から知らせを受けた羊飼いたちがイエスに会いに来ました。



しかし、クリスマスの物語はイエスの生誕のはるか前に始まっていました。イエスがお生まれになる何百年も前から、多くの預言者がメシアの来臨について語っていました。預言はメシアの来臨についての詳細を語っています。イエスが生まれた場所や時期、また両親の家系について、イエスがお生まれになる何百年も前に告知されていたのです。預言には、メシアが処女から生まれるともありました。そして、世の罪の赦しと癒しのために、メシアがご自身の命をいけにえとしてささげると語りました。その三日後には、死から新しい命へとよみがえることも預言されていました。何よりも驚くべきことは、お生まれになる幼子は、人の姿をとってご自身の民のもとに来られた神であると預言が示していたことです。



私たち人間は、人に何かを伝えなければ、話しかけます。言葉がなければ、意志疎通は難しくなります。ですから、言葉が必要です。神は私たちをお造りになったお方ですから、私たちの必要をご存知です。それで、神は預言者を送って、神のみことばを告げ知らされました。また、預言者をとおして、神のみことばを文字のかたちで与えてくださいました。それが聖書です。しかし、言葉ではうまく伝えることができないものもあります。愛がそのひとつです。愛していると言うこともできますが、本当に愛を伝えようと思えば、相手と時間をともに過ごし、行動をもってその愛を示さなければなりません。ですから、神がご自身の愛を私たちに伝えようとなさったとき、イエス・キリストという人となって私たちのもとに来てくださったのです。



ヨハネの福音書は、イエスが人の姿で私たちのもとに来てくださった神であることに重点をおいています。ヨハネ 1:1 と 1:14 にはこうあります。「1:1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。1:14 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」言は神であり、言は肉となったのです。イエスがお生まれになった時、それが、このお方の命の始まりではありません。イエスは永遠の神、創造主であり主なるお方です。にもかかわらず、イエスはご自身を低くして、人の姿をとって私たちのもとに来てくださいました。しかも、小さな町の家畜小屋で、地味な両親のもとに生まれた赤ちゃんとしてです。

今朝、私たちは主イエス・キリストのご降誕を祝っています。これは祝うにふさわしいできごとです。というのも、イエスをとおして、神が私たちに對するご自身の愛をはっきりと現してくださり、すばらしい恵みあわれみを与えてくださったからです。では、この良き知らせに私たちはどう応答するでしょう。そのことについてお話ししたいと思いますが、まず、イエスがお生まれになった後、イエスを拝みに来た東方の学者たちの話を見てみましょう。マタイ 2:1-12 をお読みしましょう。

II. 聖書朗読 マタイ 2:1-12 (新共同訳)

2:1 イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、2:2 言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方

は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」2:3 これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。2:4 王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。2:5 彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。2:6 『ユダの地、ベツレヘムよ、／お前はユダの指導者たちの中で／決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、／わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」

2:7 そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。2:8 そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。2:9 彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。2:10 学者たちはその星を見て喜びにあふれた。2:11 家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。2:12 ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

III. 教え

マタイは、東方の占星術の学者たちについて詳細を述べていません。おそらく、当時は説明をしなくてもわかるほど著名な人物たちだったのでしょう。現代では、占星術の学者たちといっても、誰のことかわかりませんが、少し調べてみると、わかってくることがあります。占星術の学者の部分で使われている英語の Magi という単語からは、判事を意味する magistrate やマジシャン magician という単語を連想します。これはすべて同じ語源からの派生語です。判事は裁判官の一種ですし、マジシャンは巧妙なトリックで人をあっと言わせます。ですから、ここに出てくる学者たちが特別なパワーの持ち主と見なされ、権威のある人であったと言っても驚くことはありません。歴史を見てみると、Magi という単語は古代バビロニアおよびペルシアで賢者や魔術師を指す言葉として使われていた単語から来たことがわかります。特に、夢の解き証しや占星術の学者に使われていた単語だったようです。この地域は、現代のイランやイラクに相当する場所です。



旧約聖書を見てみると、バビロン捕囚の時代に、預言者ダニエルが賢者や魔術師の長官に任命されたことがわかります。ダニエル 2:48 「王はダニエルを高い位につけ、多くのすばらしい贈り物を与え、バビロン全州を治めさせ、バビロンの知者すべての上に長官として立てた。」ダニエルが自身の預言を含む旧約聖書の写本をこれらの賢者たちに託したことが考えられます。もしそうなら、占星術の学者たちはある日なんとなく空を見上げて新しい星を見つけて遠く離れた場所までそれを追いかけたというわけではありません。むしろ、占星術の学者たちは、メシアのお生まれになるおおよその時代を聖書から割り出し、空を見上げて神からのしるしを待っていたと言えます。そして、彼らの待ち望んだしるしを神が恵みによって与えてくださったとき、彼らは一目散にその星を目指したのでしょう。

バビロニアからイスラエルはかなりの距離があります。当時は 1,600km 近くもの道のりを行く旅にそう簡単には出かけませんでした。ですから、彼らにとってこれは大切な使命だったことが明らかです。学者たちはなぜそれほどまでに生まれたての王に会いたがったのでしょうか。ペルシアの歴史によると、学者たちは王の相談役という任務があっただけでなく、新しい王を選任する役割もあったからです。彼らは持てる知恵と能力を用いて、誰が王になるべきかを予見し、その人を新しい王として指名しなければなりません。通常、彼らの任務はペルシア王の選任に限られていましたが、この場合、彼らはすべての民を支配する王の王を探していました。すべての民ということは、ペルシアも含まれるからです。

どんな専門家にも言えることですが、占星術の学者たちの知恵の多くはおそらくまやかしだったでしょう。しかし、彼らの知識には多くの真理も含まれていました。創造主なる神について、また神がお送りになるメシアについての知識などがそれです。古代の預言が、メシアの生誕をいつごろ予期すればよいのかを教えてくださいました。彼らは、王の生誕が星によって示されると理解し、空にそのし



るしを探しました。そして、神は星を与えてくださいました。彼らが信じるために、それが必要だったからです。神は必ずしも私たちの望むようなしるしを与えてくださるとは限りませんが、私たちの信仰に必要なものは与えてくださいます。

マタイ 2:1-2 「2:1 イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、2:2 言った。『ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。』」学者たちはおそらく、ダニエルの時代までに書かれた聖書の写本を持っていたのでしょう。しかし、ミカ書は持っていませんでした。というのも、それはイスラエルの民がバビロン捕囚から帰還した後の時代に書かれたからです。それで、メシアがベツレヘムでお生まれになるというミカの預言は知りませんでした。そこで、彼らはイスラエルの都に行き、王として生まれた方はどこかと尋ねたのです。

ここで少し想像してみてください。占星術の学者たちは、しばしば三人の賢者として表現されます。それは、贈り物が3つだったからです。しかし、マタイはその一団の規模については触れていません。おそらく、学者たち以外にも召使いや護衛などを従えた数百人の団体だったと考えられます。学者たちは裕福な権力者でしたから、お生まれになった王に会うための長旅に自分たちだけで出かけることはないでしょう。ですから、エルサレムに団体が到着して大騒ぎになり、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。」と尋ねまわったのです。「ユダヤ人の王」は、ヘロデ王の称号のひとつでした。つまり、ヘロデが新しい王によって取って代わられると学者たちが触れ回ったこととなります。

ヘロデ王は残忍なことで知られており、自分の邪魔になる人間は誰でも殺すような人でした。王の選任役である学者たちが町にやってきて、新しい王がお生まれになったという知らせを告げたことで、ヘロデは憤慨していたでしょう。しかし、ヘロデ王は残虐なだけでなく狡猾でもありました。すぐさま学者たちを殺してしまいたいと思ったでしょうが、そうすれば、新しい王を生かしておくこととなります。そこで、ヘロデ王はあることを企てます。つまり、学者たちから新しい王の情報を引き出し、その王を殺してしまおうというのです。しかし、神が学者たちとヨセフに危険を知らせました。そして、学者たちはエルサレムを通過して帰るのを避け、ヨセフとマリアはイエスを連れてエジプトに逃れ、ヘロデ王が亡くなるまでそこにとどまりました。

学者たちがベツレヘムに到着した時に何が起こったか見てみましょう。マタイ 2:11 「家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。」

学者たちは、黄金、乳香、没薬という3つの贈り物を携えてきました。それぞれどれくらいの量であったかはわかりませんが、どれほどの価値だったかを推測することはできませんが、これらは高価な贈り物でした。しかしそれ以上に、各々の贈り物には、幼子キリストについての象徴的な意味が込められていました。黄金は主が王であることを語ります。黄金は王に対する贈り物でした。乳香は主の神性を示していました。乳香は礼拝に使われるものでした。また、ささげものとしてささげられていました。ですから、キリストが神であることを示すものです。没薬は主の人間性と来たるべき死を示しています。というのも、これは遺体の防腐処理に使われるものだったからです。これらの贈り物は、イエスについて多くを語っています。王の王、肉をまとった神でありながら、同時に人間であるお方。この世にお生まれになったのは、私たちの罪のために十字架上で死ぬためであり、それによって私たちが永遠の命を得るためなのです。



IV. 結び

クリスマスの物語には、いくつかの旅が登場します。その中でももっとも偉大な旅はキリスト・イエスの旅です。イエスは神の御座を離れ、ご自身の栄光と力を捨てて、小さな田舎町で処女から生まれた幼子としてこの世に来てください



ました。ご自身を完全に低くしてくださったのです。イエスの旅路は愛の旅路です。イエスが来てくださったのは、私たちに深く愛してくださったからです。そして、私たちに救いを与えるためならすべてを捨てて十字架上で死ぬことをよしとしてくださったからです。

クリスマスの物語には、ヨセフとマリアの旅もあります。ふたりは故郷ナザレを離れてベツレヘムへと旅しました。ヨセフとマリアの旅路は、従順の旅路です。彼らは、人口調査のためにベツレヘム行きを余儀なくするローマ帝国の勅令に従いました。しかしそれ以上に、ふたりは神のご計画に従って、ベツレヘムに行き、メシアがそこでお生まれになるという預言を成就したのです。



そしてもちろん、賢者たちの旅もあります。彼らは遠い道のりを旅しました。それは、聖書の預言と星のしるしを信じたからです。つまり、彼らは神を信じたのです。ここで気づくべき重要な点は、学者たちがただ単に新しい王を選び出し、贈り物をささげるためにベツレヘムに行ったのではないということです。彼らには、旅の目的がちゃんとありました。マタイ 2:2 にある彼らの問いかけを見てみましょう。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」彼らがイスラエルまで旅したのは、イエスを拝むためです。学者たちの旅路は、信仰の旅路でした。



学者たちと同様、私たちも信仰の旅路を歩んでいます。2000年前、学者たちはイエスを拝みにベツレヘムに行きました。私たちは今朝、イエスを礼拝しに教会に来ました。彼らの旅は数カ月に及ぶ長い道のりを行くものでした。また、途中には険しい道や危険もあったでしょう。私たちの場合は、ほとんどの人が電車で一時間以内に來られる距離です。地理的・物理的な意味では、学者たちの旅路と私たちの旅路はまったく違ったものです。

しかし、信仰の旅路で重要なのは、移動距離やそれにかかる労力ではありません。信仰の旅路で重要なのは、その過程で私たちの内側、つまり心で起こることです。信仰の旅路は、国から国、町から町という旅ではありません。もちろん、そのような旅によって信仰が現れる場合もありますが、信仰の旅路における本質的な意義は、不信仰から信仰へ、疑いから信頼への旅です。



賢者たちはなぜベツレヘムに行ったのでしょうか。神が語られ、彼らがそれを信じたからです。神は私たちにも語り掛けられます。自然をとおして、聖書をとおして、奇跡やしるしをとおして、教会の兄弟姉妹をとおして、語られます。けれども、何にも増して、神はイエス・キリストというお方の人生をとおしてご自身の愛を語られます。このお方は救い主メシアです。私たち皆が、そして私たちの家族や友人、隣人が皆、神の語りかけに耳を傾け、信じるようにと祈ります。

では祈りましょう。

V. 祈り